

「新時代への挑戦—時空と世代を超えてつながる日系」

第

2021年10月30日・31日

61回海外日系人大会 オンラインで開催



当協会では10月30日(土)、31日(日)の2日間にわたり、第61回海外日系人大会をオンラインで開催する。新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により、昨年は同大会の開催を見送り、代替行事としてオンライン・フォーラムを実施したが、今年は第61回大会をZoomウェビナー形式で開催する。

長引くコロナ禍の日系社会—現状と今後の展望は

大会初日に行う開会式では、おことば、外務大臣等来賓の挨拶のほか、各国日系社会からの報告(ビデオメッセージ)、および今年6月より一般公募していた「国際日系デー」ロゴマークの受賞作品発表等を行う。また、アルゼンチン出身の日系2世・松本アルベルト氏(合資会社アイデアネットワーク代表、静岡県立大学講師)による基調講演も予定している。

大会2日目は、「コロナとたたかう日系社会—今後の課題と挑戦」と題したシンポジウムを行い、①「日系団体の活動とその活性化」、②「日系メディアと日系博物館の役割」、③「在日日系社会の課題と挑戦」という3つのテーマでそれぞれパネルディスカッションを実施する。

パネル①「日系団体の活動とその活性化」では、当協会常務理事(日本記者クラブ前専務理事)の中井良則氏をモデレーターに、各地の日系社会で、医療や教育活動、婦人部・青年部等が、現在のコロナ禍においてICT技術などを用いてどのような活動をしているのか、各現場からの報告を聞くとともに、日系団体の活動の将来を展望する。

パネル②「日系メディアと日系博物館の役割」では、慶應義塾大学文学部名誉教授でJICA横浜 海外移住資料館学術委員の柳田利夫氏を

モデレーターに、日本文化と日系社会のレガシー継承に大きな役割を果たしてきた邦字紙、日系メディアや日系博物館が、コロナ禍でどのような状況に直面し、今後どのような方向を目指すのかを討議する予定だ。

また、パネル③「在日日系社会の課題と挑戦」では、当協会常務理事で武蔵大学社会学部教授のアンジェロ・イシ氏をモデレーターに、コロナ禍が在日日系コミュニティに与えている影響や、子弟教育、高齢化、就労問題、日本社会との共生等について、当事者の経験や事例を聞き今後の課題について討議する。

参加登録受付中!

大会初のオンライン開催となることから、今大会では大会宣言の採択は行わず、後日、討議内容をまとめた大会記録としてWEBサイト等で公開する予定。参加費は無料で、事前登録制(参加資格:日系人並びに同大会の趣旨に賛同する方。国籍不問)となる。参加申し込みは、当協会WEBサイトにて受付けている。タイムスケジュール等の詳細については当協会WEBサイトをご参照ください。(「海外日系人大会」で検索)
<http://www.jadesas.or.jp/taikai/index.html>



国際日系デー公式ロゴマーク 第61回大会の初日プログラムにて発表!

当協会は、パンアメリカン日系人協会(APN)と共同で「国際日系デー」の公式ロゴマークを公募した。より多くの人々に「国際日系デー」について知ってもらうと共に、世界各地の日系人が自らのアイデンティティに思いを馳せ、連携を通じて国際社会に貢献している姿を広めたいと考え、今年6月20日、制定後3度目の記念日を迎えた国際日系デーにおいて募集を発表、8月31日を締切としていた。

国籍や居住地、年齢、性別等の応募資格を設けず、世界各地より広く募集を行った結果、7カ国より応募要件を満たす41作品の応募があった。審査は、アルゼンチン、北米(ニューヨーク)、メキシコ、ペルー、日本からそれぞれデザイン、アートの分野で活躍する専門家に依頼。オンラインによる審査会を経て選ばれた作品を、10月30日の開会式にて発表する。

ブラジル南部の移住地で3代続く巡回診療 社会貢献支援財団創立50周年記念表彰を受賞

森口エミリオ秀幸 医師

ブラジル南部の奥地に入植し、病気になっても気軽に受診できるような病院がない、日本語で診てくれる医師がない、そんな状況下にある日本人移住者たちのために、毎年およそ1カ月間をかけてボランティアで移住地を回り、ポルトガル語のできない高齢1世たちに寄り添い日本語で巡回診療を行う医師がいる。

約90年前に祖父がはじめ、父、そして自分と、祖父の意思を引き継ぐ形で巡回診療を続けている医師の森口エミリオ秀幸さんがこの度、(公財)社会貢献支援財団が財団設立50周年を記念して、過去10年間の社会貢献表彰者※の中から5名を特別に選出・表彰する「創立50周年記念表彰」を受賞した。

ブラジルの森口医師にコンタクトを取り、9月3日、オンラインによるインタビューに応じていただいた。

※社会貢献表彰は、人命救助や社会福祉、青少年の育成、国際協力や環境保護などの分野で広く社会と人々のために貢献し、顕著な功績を挙げながらも報われる機会の少なかった方々を対象に行われている日本財団の助成事業。

10歳で祖父の暮らすブラジルへ

ブラジル南部サンタ・カタリーナ州とリオ・グランデ・ド・スール州の日本人移住地で巡回診療を最初に始めたのは、岐阜県出身の日本人医師・細江静男氏。1930年に外務省の嘱託医としてブラジルに派遣され、3年の任期を終えた後もブラジルに残り、無医村地域の巡回診療に力を注いだ。森口医師は、「ブラジルのシュバイツァー」「アマゾン先生」「道庵先生」等と呼ばれ、日本人移住者から厚く信頼されていた細江氏の孫にあたる。

インタビューの日、ブラジルは夜9時半を少しすぎた頃だったが、森口医師は白衣にマスク姿で、勤務先のポルトアレグレの大学病院にいた。車で3時間ほど離れた移住地で暮らす高齢の1世が畑作業中に転倒し、頭を強く打ったとの電話連絡が入ったのだという。写真で怪我の状況を確認し、すぐに救急車を手配。自らが働く大学病院に救急搬送したところ脳内出血が認められたため、検査結果が出るまで待機しているとのことだった。

森口医師は東京で生まれ、10歳になるまで東京で暮らしていた。父・森口幸雄氏は熊本県天草市の出身で、慶應大医学部に在学中、恩師の勧めでブラジルで医師として活躍していた細江氏の元を訪ね、細江氏の三女と出会い結婚。結婚にあたり日本に戻った両親のもとに生まれたのが森口エミリオ秀幸医師だ。

細江氏は森口医師にとって、母方の祖父ということになる。1967年、森口少年が10歳の時に、祖父・細江氏が父・幸雄氏を呼び寄せ、森口一家は移民船ぶらじる丸でブラジルに移住した。

祖父・細江静男医師の姿に憧れた少年時代



ゆっくりと高齢1世の話に耳を傾ける森口医師

に来てくれたこと。ひとりひとりから投げられたお別れの紙テープを握りしめ、港が水平線の彼方に消えて見えなくなるまで泣き

ブラジルに移住することになった当時のことを、森口医師はよく覚えているという。小学4年生。友だちと別れるのが嫌で嫌で、悲しくてたまらなかったこと。横浜港まで担任の先生とクラスメート

全員が見送り

がら甲板にいたこと。

40日間の船旅もずっと憂鬱な気持ちで過ごし、サントスに着いて祖父と会えた時に、ようやくホッとできたのだと当時を振り返る。

「当時すでにブラジルで医者として活動していた祖父が、移民船の中まで上がってきて、ブラジルに到着したばかりの移住者たちに新しい生活のこと、医療のことなどいろいろと説明する姿を見て、なんだか誇らしい気持ちになったことを覚えています」

ブラジルに移住してからの数年間は、サンパウロの祖父母宅で過ごし、週末の巡回診療についていくようになった。

「祖父は、昼間は診察をし、夜には移住地の人たちを集めて、色んな話をしていました。私は会場の奥のほうで看護師さんたちと一緒に座って、おじいちゃんはずごい人なんだな、カッコいいなと思いつつ聞いていました。祖父への憧れや尊敬の気持ちが、医者になろうと決めたきっかけになっています。祖父からは、ボランティアの心、人のために何かできることをしよう、そういった温かい心構えを学びました。巡回診療は、それを形にするひとつの手段だと思っています」

親子3代のストーリー

「巡回診療は、私の祖父細江静男が1930年にはじめ、それを父が1971年から続けてきました。父はいま95歳ですが、父が80歳になったころから私が後を引き継ぐようになりました。」

いまだに、あなたのおじいちゃんにも、お父さんにも診察してもらったと言ってくれる方がいらっしゃる。今は、娘が医学部で勉強していて、休みになると手伝いに来てくれます。娘が後に続いてくれれば4代目になるわけです」

森口医師の長女愛子さんは、建築家に憧れて一旦は大学の建築学部に入學した。しかし、巡回診療を手伝う中で移住地のおじいちゃん・おばあちゃんたちにかげられた「お父さんがいなくなったら、誰が巡回診療してくれるの?」という言葉がきっかけに、医者になることを決意し、建築学部を中退して医学部に入り直したのだという。

「ブラジル南部には、戦後、1950年代に移住した方が多い。日本がまだ貧しくて困っていた時代に、夢を抱いてブラジルに渡った方たちで、数はだいぶ少なくなりましたが、私の巡回診療を必要としている1世は今も400人以上います。皆さんお年を召して70~90代になっている。今回の受賞は、ブラジルの奥地にそういう方たちがいらっしゃるということ、そして祖父が始めた巡回診療の活動について、日本の皆さんに知っていただくよい機会になると思います」

クラウドファンディングで資金集め

毎年およそ1カ月間をかけて3000キロ以上の距離を移動しながら移住地を訪ねる巡回診療は、南日伯援護協会の事業として無料で行われている。移動・宿泊にかかる費用や機材、検査費、

薬代などにはJICAからの助成金が充てられているが、それだけでは足りず、不足分は父・幸雄氏の時代から森口家の持ち出しで行われてきたという。

「巡回診療を続けるということは、奥地に行つて診察をするだけではないんですね。経済的に苦しい人のために薬を購入したり、治療のために町に出て来なければならない人には旅費やホテル代なども必要で、そういったものも全部含んでいます。最近は高齢化によって色々な形での出費が増えてきています」



日本からの医学生たちと。前列右から二人目が父・森口幸雄医師

森口医師が客員教授として年に数回講義をしている、横浜市立大学や、防衛医大、千葉大から医学部の学生たちがボランティアとして参加するようになると、移住地の1世たちはそれまで

以上に巡回診療を心待ちにしてくれるようになったというが、人員が増えればコストも増える。そこで、2014年に横浜市立大の教員や学生たちが中心となってクラウドファンディングを立ち上げ資金集めを開始。その後、森口医師の状況を知った大学院時代の仲間たちが「自分たちが力になる」と立ち上がり、クラウドファンディングが継続されているという。

「私は1986年から91年まで日本で大学院に通っていましたが、当時の仲間何人かとはいまでも親しくしています。年齢的にみんな、教授とか偉くなっていて、彼らが集まって、東京の浜松町にエミリオ森口クリニックという名前の社団法人を作ってくれたんです。

クリニックでは、みんなが持ち回りで診察を担当し、待合室では巡回診療の様子を紹介するビデオを流してくれています。それを見た患者さんたちが、寄付をしてくださるようになりました。クラウドファンディングは毎年5月から12月くらいにかけて実施していますが、おかげ様で毎回多くの方々のご支援をいただいています」

コロナ禍の巡回診療

昨年、巡回診療もやむなくオンライン診療となった。事前に検査依頼書を送付し、血圧や心電図などを測定し数値を記録してもらったうえで、オンラインで診察を行う。オンライン診療の実施には、各移住地で若者のサポートが必要だが、中には子供がいない、近所に若者がいないという状況もある。

「どうしてもオンラインでつながることができない方には、電話で診察を行いました。ほとんどはオンライン診療ができていますが、それでもやっぱり高齢のみなさんにとって、実際に会ってお話しをすること、触れ合うことというのは何より大切なんですよ。この状況がいつまで続くかわかりませんが、早く移住地に出向いて診療できるようにしたいです」

ポルトアレグレに日系の高齢者施設を

森口医師の現在の目標は、ブラジル南部の中心地であるポルトアレグレに、日系の高齢者施設を作ることだという。1990年代、

日本へのデカセギ・ブームがはじまった頃から移住地に若い世代がいなくなり、残っているのは高齢者ばかりになってしまった。

「以前は青年会なんかがあって、移住地も盛り上がっていましたが、若者がいなくなってからは単に人数が減ったということだけでなく、何というか、夢がなくなってしまったというか。一度日本へ行ってしまうと、多くがそのまま帰ってこないですよ。帰ってきたとしても稼いできたお金で町に家を建てて住むようになり、町でビジネスを始めたり。移住地に戻ってくる若者は本当に少数です。デカセギが始まってから、移住地のパワーは失われてしまいました」

生活が困窮し、薬も買えないような高齢者も少なくないが、1世の多くは「海外で一旗揚げる」ことを目標に日本から出てきた人たちで、いまさら日本に戻るなどできない、日本の親族に迷惑をかけられない、と思っている人が多いと森口医師は言う。そして、慢性疾患を抱えていたり認知症になってしまったり、自立した生活が困難な人たちが増えているのだという。前述の救急搬送された高齢者も、娘は町で暮らしていて傍にいない。今後自分の足で歩いて退院できるかどうかもわからない。サンパウロには日系の病院も高齢者施設もすでにあるが、南部地域こそ生活に困っている日本人高齢者が多く、そういう人たちを日本語でケアできる施設を作ることが急務だと感じているという。

日本への郷愁と奮い立つ想い

年を重ねるごとに、日本への郷愁の想いが強くなってきたと話す森口医師。「今年で63歳になりましたが、日本の空港で「おかえりなさい」と書いてある看板を見るたびに、なんだか涙が出るようになってきましたね」と笑う。

日本で大学院時代の仲間たちと会うと必ず「森口、お前日本に戻ってこないのか?」という話になる。みんな日本でそれなりの地位についているが、一方の自分は相変わらずブラジルで朝から晩まで働いている現実に、心が揺らぐこともあるという。

「でも、ブラジルに戻った瞬間にその気持ちどこかへ消えてなくなっちゃうんですよ。今日みたいに、私を必要として頼ってくる患者さんがいる。私の後を継ぐために医者になると決めてくれた娘もいる。一緒にがんばってくれている援護協会のスタッフもいる。そう思ったら、自分だけ日本に帰れる訳がありませんよね。私がやらなくちゃならないことが、まだまだここにあるんです」

日本との往復は、その気持ちの揺れ動きの繰り返しだという。

「祖父が始めたことを父が受け継いで、自分が今ここにいる。これは偶然ではなくて、自分はこの場所になくちゃいけないんだと思います。今回の受賞は、お前はここに残れという声のようにも感じました。秀坊、しっかりやってくれよ!と祖父に言われているような気がしますね」

◆クラウドファンディングについてのお問い合わせ◆

GBRAZIL-PROJECT: brazil-pj@cmic.co.jp



4代目となる娘の愛子さんと

▶森口エミリオ秀幸

1958年東京生まれ。世界保健機構(WHO)老年医学慢性疾患予防センター長及び老年医学分野ブラジル代表。1982年、リオ・グランデ・ド・スール連邦大学医学部卒業。1991年、博士号取得。同年、リオ・グランデ・ド・スール州カトリック大学老年医学研究所教授に就任。2006年よりリオ・グランデ・ド・スール連邦大学大学院教授、2008年より横浜市立大学医学部社会医学予防教室客員教授。2018年より千葉大学医学部客員教授。東京都港区浜松町にある医療法人社団エミリオ森口、芝浦スリーワンクリニック顧問。

和合ハス・礼氏(わごう・ろはす・ひろし)さん

世界各地で活躍する日系人や日系団体のみなさん、もしくは日系人・日系社会に関わる活動をしている皆さんにお話を伺うコーナー、「NIKKEIS Around the World」。第8回にご登場いただくのは、コロンビアの和合ハス・礼氏さんです。日本留学の経験を活かして、コロンビアの魅力をアジア地域へ多方面からプロモートする現在のお仕事について、そのおもしろさや直面している課題などについて、メールインタビューの形で話を伺いました。

留学生だった自分に白羽の矢が

2011年から2年間、「JICA日系社会リーダー育成事業」の奨学金を得て、JICAと海外日系人協会のサポートにより早稲田大学大学院で国際関係学を学び、修士号を取得しました。日系人として日本で学ぶという素晴らしい機会を与えられたことに、とても感謝しています。卒業後は「プロコロンビア(コロン



和合ハス・礼氏さん(中央)

ビア貿易投資観光促進機構)」という組織に就職しました。プロコロンビアは、海外からコロンビアへの直接投資を促進するために、あらゆる方面からコロンビアのプロモーションを行う政府系エージェントです。国際市場におけるコロンビア製品の輸出や、観光地としての魅力発信などもサポートしています。現在、世界各地に27のオフィスがあります。



東京ビッグサイトで開催されたスペシャルティコーヒーの国際見本市

この10年間ほど、コロンビア政府はアジアとの結びつきや、ビジネスにおける国際的プレゼンスを高めることを目標にしてきました。しばらく閉鎖されていた日本のオフィスを再開したほか、アジア諸国でも新たにオフィスをオープンしようというタイミング

で、当時日本で留学生として国際関係学を勉強していた私に「やってみないか」と声がかかったのです。

私に与えられた最初の仕事は、日本オフィスを統合して販促活動を行うことでした。同時に、韓国、シンガポール、インドネシア、アラブ首長国連邦と中国にふたつ(上海と広州)のオフィスを新たに立ち上げるためのサポートも行いました。

刺激的な学びの日々

2019年11月に、日本で暮らすという私の人生における特別な期間を終え、現在はコロンビアに戻って副総裁としてプロコロンビアの更なる発展のために働いています。日本での経験から得た全ての知識とエネルギーを結集して、新しいミッション、特に開発分野にチャレンジしています。

仕事は、とにかくとても刺激的です。各種セミナーへの参加や、個人投資家との一対一のミーティングなどから、コロンビア経済の様々なセクターを学んでいます。また、コロンビアの輸出品を、世界で最もハイスタンダードな国のひとつである日本の市場に紹介し、広めるためにはどうしたらよいか、というような課題への取組みからも、日々たくさん学ぶことがあります。現在のコロナ禍ではまなまりませんが、日本のみなさんに、観光地として素晴らしくユニークなコロンビアの魅力、例えばコロンビアでは1週間の滞在で四季のすべてが楽しめることなどをお伝えすることも、私にとってはものすごく楽しい仕事です。

プロフィール

国籍・世代:コロンビア・2世

職業:プロコロンビア(コロンビア貿易投資観光促進機構)副総裁
コロンビアの首都、ボゴタ市在住。コロンビアのエステルナド大学で政治経済・ファイナンス・国際関係学を専攻。JICAの日系リーダー育成事業で来日し、2011年から2013年の2年間、早稲田大学大学院の修士課程で国際関係学を学ぶ。修士課程在学中より、プロコロンビア日本オフィスで働き始める。2020年12月、コロンビアに帰国。現在はプロコロンビア副総裁として国際戦略およびデジタル・トランスフォーメーションの発展に務める。

ネガティブイメージの払拭が課題

コロンビアに対する人々の認識と、実際のコロンビアの現状に大きなギャップがあるというのが、この仕事をする上で一番の困難だと思っています。80年代~90年代の政情不安等の影響で、残念ながらコロンビアについて、危険な国というイメージを持っている人は少なくないと思います。でも実際のところ、コロンビアはこの20年ほどで、治安や経済面でも大きく発展しています。日本をはじめアジアの皆さんに、コロンビアの現状を正しく知ってもらいたい。そのための努力をこれからも続け、コロンビアにたくさんの可能性を見出してもらえたらと思っています。

日系コロンビア人として

日系コロンビア人として、日本の人々にコロンビアのプロモーションができるこの仕事に、とても誇りとやりがいを感じています。2つの文化的バックグラウンドを持っているということは、とても貴重な財産です。そのおかげで、2つの国が双方向で理解し合うためのサポートをすることができず。



コロンビア共和国独立200周年、日本・コロンビア修好110周年を記念してコロンビア国旗色にライトアップされたスカイツリー(2019年7月)

日本でコロンビアの正確な情報を得るのはなかなか難しいし、逆もまたしかりです。でも、日系コロンビア人として、2つの国をつなぐブリッジとしてこれからますます活躍したい。日本とコロンビアの結びつきをより強くするために、これからもこの仕事を通じて、世界中の日系コミュニティと共に協力していきたいと思っています。

コロナ・パンデミックの今だからこそ

日本で過ごした約8年間は、日本社会について知る素晴らしい時間でした。日本の皆さんには、個人的にも社会的にも、私が成長するためのまたとない機会を与えてもらいました。本当に感謝しています。

私たちはいま、とても大きな困難に直面しています。日系人として、世界のどこにいても、このパンデミックからそれぞれの国が再び立ち上げられるよう、誰もが自分なりの役割を果たす時だと思っています。

日本は、私たち日系人に、どんな困難からでも立ち上がることの大切さを教えてくれました。こんな時だからこそ、日系人が日系人として協力し合い、支援を必要としている人たちの力になれたらと思っています。

若者の夢をサポートしたい

コミュニティの未来を創造するために何よりも大切なものは教育だと感じています。私と私の兄は、経済的に苦しかったときに、奨学金や助成金の支援のおかげで日本のトップレベルの大学で学ぶことができました。私たちが受けて来た支援に恩返しをするために、2017年にコロンビアで「みらい基金」[https://www.fundacionmirai.org/]というサイトを開設しました。この基金は、コロンビアの学生が工学分野の学士号を得るための支援をしています。これからも若い学生たちのサポートを続け、誰にでも平等に教育の機会が与えられる国になるための小さな種として活動していきたいと思っています。

Exigência do Certificado do Exame de Proficiência N4 para renovação do visto do sansei? 3世ビザ更新のためには日本語能力試験 N4証明書の提出が必要か?

相談センター 山形エレナ

(公財)海外日系人協会 日系人相談センター

■相談受付 月曜日～金曜日(土・日曜、祝祭日を除く)
14:00～17:30

■対応言語 ポルトガル語、スペイン語、日本語

■電話番号 045-211-1788

Consulta através de e-mail.

Q Recentemente li uma matéria em um site de notícias voltado para os brasileiros, onde diz que o sansei que irá requerer o pedido de solicitação de visto ou renovação do período de permanência, deverão apresentar o Certificado de Proficiência do Idioma Japonês N4.

Estou no Japão há muito tempo, e concordo que é muito importante estudar o idioma do país, porem como é de conhecimento de todos, muitos nikkeis que atualmente estão trabalhando aqui, não tem tempo ou não veem a importancia em aprender o idioma. Muitos já estão aqui há muito tempo, inclusive eu, sejam sozinho ou com toda a família e se esta regra for confirmada como ficariam os sanseis ao renovar o visto do período de permanência? Terão seus pedidos de renovação recusados? Deverão retornar ao seu país?

São dúvidas que me deixa muito preocupado, uma vez que devo renovar o visto no próximo ano, e ainda pretendo permanecer por mais alguns anos no Japão.

A Segundo as páginas oficiais do Depto. da Imigração, no que tange aos documentos solicitados para a emissão ou renovação do visto para o sansei, não está incluso a necessidade de apresentar o certificado de proficiência do idioma japonês.

Porem, nesta mesma lista no ítem "7- outros", diz o seguinte: (6) Deverá apresentar um dos seguintes certificados para comprovação de um determinado nível de conhecimentos no idioma japonês:

※Obs.: Para aqueles que desejarem tirar o visto de permanência de 5 anos, deverão apresentar um dos seguintes documentos:

- Certificado que comprove que o requerente estudou em alguma instituição de ensino de lingua japonesa, devidamente reconhecida pelo Ministério da Justiça por mais de 6 meses.
- Certificado de aprovação do Exame de Proficiência N2.
- Certificado de do Exame de Proficiência de Kanji BJT JLRT com aprovação com mais de 400 pontos.
- Documento que atesta que o requerente estudou por um ano ou mais em escolas (exclui-se jardim de infância) estipulado no Artigo 1 da Lei de Educação Escolar do Japão.

Como é de conhecimento da grande maioria, o visto de permanência para os nikkeis é de 6 meses, 1 ano, 3 anos ou 5 anos.

Portanto para o sansei que for fazer a renovação de visto do período de permanência, não superior a 3 anos, entende-se que fica dispensado a apresentação do

certificado do Exame de Proficiência do Idioma Japonês, e somente aqueles que desejarem o visto de 5 anos deverão apresentar um dos quatro comprovantes acima.

Documentos solicitados para a renovação do visto do sansei/conjuge empregado (em japonês).

https://www.moj.go.jp/isa/applications/procedures/zairyu_koshin5_01_01.html

メールによる相談

相談 最近、ブラジル人を対象とした情報サイトで、新しくビザを申請する3世や在留期間の更新を求める3世は、日本語能力証明書N4を提出する必要があるとの記事を読みました。

私は日本には長い間住んでおり、居住国の言語を勉強することが重要であることはよくわかります。しかし、日本で働いている多くの日系人は、勉強する時間がない、あるいは言語の勉強の大切さを承知していない状況です。私も含め、多くの日系人は、一人暮らしの者であれ家族と一緒にのものであれ、すでに長い間日本で暮らしてきています。もし、この新しい規則が正式に適用されることになると、在留期間の更新を申請する3世はどのような状況に置かれるのでしょうか。彼らの更新申請は拒絶されるのでしょうか。本国に帰国せざるを得ないことになるのでしょうか。このようなことで私は今とても心配しています。なぜなら、私は来年、ビザを更新しなければならないのですが、日本にはあと数年は在留したいと考えているからです。

回答 入管当局の公式ページによると、(在留期間5年を申請しないのであれば)在留資格「定住者」(3世ビザ)の発給あるいは更新に要する提出書類には日本語能力証明書は含まれません。

同ページの第7項【その他】の(6)は(在留期間5年を希望する場合には)「一定の日本語能力があることを証明する次のいずれかの証明書を提出する」として証明書として次の4つを挙げています。

- 法務大臣が告示で定める日本語教育機関において6カ月以上の日本語教育を受けたことを証明する文書
- 日本語能力試験N2に合格したことを証明する文書
- 公益財団法人日本漢字能力検定協会が実施する BJTビジネス日本語能力テストJLRT聴読解テスト(筆記テスト)で400点以上を取得したことを証明する文書
- 学校教育法第1条に規定する学校(幼稚園を除く)において1年以上の教育を受けたことを証明する文書

従って、3年を超えない在留期間の更新を申請する3世には日本語能力検定試験の証明書の提出は免除されていると考えられます。

在留資格「定住者」(いわゆる3世ビザ)の在留期間更新に際して必要となる提出資料(日本語)のサイト

https://www.moj.go.jp/isa/applications/procedures/zairyu_koshin5_01_01.html

大岩オスカルさんの作品が完成 JICAプラザよこはまリニューアル

JICA横浜の広報・展示スペースとして一般に公開している1階、2階の「JICAプラザよこはま」リニューアルに伴い、ブラジル出身の日系2世でニューヨークを拠点に活動しているアーティストの大岩オスカルさんが9月に来日し、1階正面玄関のガラス面いっばいに油性マーカーでドローイング作品を制作した。

今回のリニューアルで、2階入り口のガラス面および5本の柱にはすでに同氏の作品を展示していたが、今回は実際に来日し、アシスタントと共に自らが11日間をかけて制作。これによりすでに展示されていた2階の作品を含め「トラベリング・アラウンド・ザ・ワールド」と題した一連の作品が完成した。

「2階はPCで作った作品をデータで送ったもので、机に座って手だけで描いたけれど、今回のような大きな作品は自分の身体全体を使って描く。すごく体力を使うけれど、身体を使うからこそ自分らしい線というか絵が描けるというか」と話すオスカルさん。マーカーペンだけで描き上げるシンプルな作品だけに、その中でどれだけ個性が出せるかというのが意味チャレンジなのだという。

「ここは100年前は港で、たくさんの方がここから世界へ出て行った。当時はずも



制作風景。油性ペンだけで描く綿密な作業

日系社会 Topics

のすごい冒険で、行く先に何があるかわからないような状況で。でもいまの私たちにはここが昔どんな港だったのか、当時の姿ってあんまり想像できないと思うのね。作品はガラスの透明な部分と半透明な部分とに分かれているので、ここから外を眺めてみて、100年前を想像してもらえたら面白いんじゃないかなと」

大岩さんの父親は神戸港から、母親は横浜港からブラジルへ渡った移住1世。港を出て、行く手のわからない未来の荒波を進んでいく移民船が描かれた力強い作品となっている。



完成した作品の前で。右はアシスタントのYukaさん

令和3年度外務大臣表彰、当協会 岡野護常務理事が受賞

令和3年度の外務大臣表彰受賞者が去る8月20日に発表され、当協会の岡野護常務理事が受賞した。岡野氏は、学生移住連盟を経て1977年に協会に就職。以来、業務部長、総務部長、事務局長を歴任してきた。海外日系新聞放送協会事務局長（現専務理事）も兼任し、長年にわたり海外日系社会と日本との架け橋作りに努めてきたことが、今回の受賞

につながった。2016年に当協会を退職した後は、常務理事に就任。2020年には初めての著書となる『年表 移住150年史 邦人・日系人・メディアの足跡』を出版、海外日系社会と日系人についての知識普及にも寄与している。

同氏のほかに、2002年に静岡県浜松市で南米系外国人学校「ムンドデアレグリア」を設立し、日本で暮らす南米系の子どもたちの教育を支援する、同校校長兼理事長の松本雅美さんも受賞した。

CIATE専務理事に 影山新さんが就任

当協会では、厚労省からの委託により、ブラジルの国外就労者情報援護センター（CIATE）へ専門職員を派遣しているが、この度、浅野康平前専務理事の任期満了に伴い、新たに影山新氏が専務理事に就任、当協会でのプリーフィングを終え8月12日にブラジルへ向けて出発した。影山新専務理事は、栃木県出身の弁護士。日本で就労したいと考えているブラジル在住の日系人らを対象に、情報提供や相談業務を担当する。

当協会でインターン受入 ハワイ2世の神宮寺藍夏さん

当協会では、7月末～8月にかけて、ハワイ出身の2世・神宮寺藍夏さんをインターンとして受入れた。日本人のご両親のもとハワイで生まれ育った神宮寺さんは、現在北米・南カリフォルニア大学で東アジア文化を専攻。夏季休暇を利用して来日し、日系人に関わる様々な事業を行う当協会でインターンを希望。2週間ほどの短期間ではあったが、英語版の出版準備を進めていた「職場で役立つ日本語会話集」の翻訳チェックや、第61回大会の事務局ミーティングへの参加などを行った。

NIKKEI no.50
Network
2021 OCT.
海外日系人協会だより

発行／(公財)海外日系人協会 〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2F
TEL:045-211-1780 FAX:045-211-1781
E-mail:info@jadesas.or.jp URL:www.jadesas.or.jp 編集発行人／椿 秀洋

日本で安心して
過ごす為に!

短期滞在・在住者向け保険
VIVA MED-S・VIVA MED-30
(Life and Health coverage)

- ・短期滞在には医療保障100%のVIVA MED-S
- ・在住には医療保障30%のVIVA MED-30がそれぞれオススメです。

VIVA VIDA!
Medical Life

Health and Life Insurance for foreigners in Japan 短期滞在・日本在住・企業就労の外国人向け医療・生命保険

New
外国人社員・スタッフ向け保険
VIVAライト・VIVAガード

- ・年間「12,000円～」と手頃な価格で用意。
- ・外国人スタッフの福利厚生の一環としてオススメです。

少額短期保険会社
(株)ビバビーダメディカルライフ
VIVAVIDA MEDICAL LIFE CO., LTD
関東財務局長(少額短期保険)第51号

- ✦ 外国人留学生向け保険
- ✦ 外国人技能実習生・特定技能1号向け保険
- ✦ LCI家財総合保険
- ✦ LCI日本人向け保険

For more information, call:

TOLL FREE: **0120-656-684**
TEL: **046-265-6685**
Visit **www.vivavida.net**

